

地域に伝わる伝説や民話、文化財などを紹介

にしあいづ物語100選 その97

生涯を農業改良に奮闘した「小野木好三」

文：矢部 征男

小野木好三は天保5年（1834）11月、奥川小山に二人兄弟の兄として生まれました。この時期は大雨と冷害で、収穫は例年の3割程度という大凶作が8年も続き「天保の大飢饉」と呼ばれ、多くの餓死者が発生した頃です。冷害被害の中心は東北地方でありました。こうした時代、好三は10歳頃から吉田組郷頭宮城家の学塾に入り、書や読書を学び、祖父からは算術を学ぶ好学少年であったといえます。14歳の頃、母が病となり生業に戻りますが、その母も38歳の若さで他界しています。この後の安政3年（1856）、好三が22歳の時、3年ほど農具製作鍛工を学び自宅に鍛冶工場を開きますが、加工機器盗難の不運に遭遇しています。時代は江戸時代から明治の時代へと大きく変わろうとしている時でした。

そのような中でも三春町から講師を招き養蚕を普及させ、果樹栽培の方法を学び、新たな西洋型木地挽機器の発明、西洋型馬耕機器のプラオやハローの製造など農具の改善などに取り組んでいます。特に馬耕機器は県の推奨品としての扱いを受け普及をみせたといわれています。

明治14年（1881）、県農事会開設のため召集をうけ、安積農学校（開成山農学校）では「土質による肥糞の適否や製造法」などを学び、翌年には東京において「稲作の改良法」や「農具に関する理学」などを学んでいます。そうした中で「その事業起こるところに身を置かなければ正当な解決はできない」ことを伝授されます。これは好三の生き方に適うものでもあったと思われれます。

明治25年（1892）、青森県上北郡稲作改良巡回教師に招聘され、同28年（1895）には青森県庁職員として未開地の開拓・農桑事業に尽力しています。退職後は八戸地方に「小野木村」の建設を志し移住開拓に努めますが、不慮の災変により土地を渋沢榮一に売却して撤退となりました。

農学研究と新しい農法の指導や普及に徹した啓蒙家の生涯は、明治42年（1909）2月、行年75歳をもって閉じられました。



小野木好三 翁



今月の表紙

今月の表紙は、一般社団法人百松による稲刈り作業から。

撮影にご協力いただきました。ありがとうございます。



編集後記

先日、農業公社でメロンの収穫作業をするのと連絡をいただき取材に行ってきました。

最初は、土の上にメロンが沢山転がっている畑を想像していましたが、なんと、キュウリやゴーヤみたいにツルを上まで伸ばして栽培していました。初めて見るメロンの栽培方法にビックリ！

地域おこし協力隊の皆さんは、約3ヶ月、大切に育てたメロンをひとつひとつ丁寧に収穫していました。

来年もメロン栽培を予定しているそうです。来年も楽しみですね♪

（三留）

